

定年退職にあたって

生命環境系教授

本田 洋

何よりも先に、お世話になった多くの教職員の皆様に厚く御礼申し上げます。1993年1月に本学赴任して依頼22年の間、農学や生命環境科学学の分野で、一貫して昆虫という生物を相手に学生達と学研を重ねてきました。その間、「自身は何をするために此処に居るのか」、本学の教育・研究を如何にして向上させるのかを教育の本質を踏まえて常に考えてきました。だからこそ時として会議では役に立たない正論を述べさせて頂きました。新入生の目の輝きも印象的で、これを何時までも持ち続けて欲しいと思っていますが、学年とともに失われて行くのが現実であり、ここに自分の微力を反省する毎日でした。科学研究の面白さと醍醐味は大学院生に伝えることが出来たと自負しています。“パワーハラメント”だととられるかもしれませんが、学生を叱り、泣かせたことも幾度かあります。しかし、こちらが本気で指導していることを彼らが判ると成果は格段と上がりました。内外からの学生を受け入れ送り出すことは、様々な土地に様々な種を蒔くことに他ならず、全てが成長するとは限りませんが、多くが立派に育ってくれば望外の喜びです。

本学での研究生活は“楽しかった！”の一言です。

最後に、本学の教育・研究体制についての思いを述べさせて頂きます。国際化の推進等のために異なる目標を掲げた多様な教育プログラムが実施されていますが、それぞれの目標が異なるなら、カリキュラム自体もそれに即応した内容であり、明確な差別、成果の責任有る評価の下にあるべきでしょう。私だけの懸念であれば良いのですが、さもなければ、学生は数字実績の犠牲者になるだけではないでしょうか。

いろいろ述べてきましたが、これもまた「自身は何をするために此処に居るのか」に他なりません。無事に楽しく仕事ができたとともに、筑波大学が一層発展されることを祈念致します。